営農インフォ

営農総合センター　指導販売課 072（444）8001

野菜

たまねぎ

◆施肥

たまねぎの追肥は2回に分ける。

第1回目の追肥は定植15～20日後に行う。品種の早晩性による追肥時期の目安は表1のとおりで、追肥後、条間に稲わらや完熟堆肥を敷き、乾燥と地温低下を防ぐ。

なお、第2回目の追肥は、早生種が1月中下旬、中生種が2月中旬、晩生種は2月下旬頃に行う。

◆除草

追肥後に土寄せを兼ねて中耕を行い、その後に除草剤を散布する。

土壌が乾燥していると除草剤の効果が劣るので、散布は雨の降った翌日など、土が適度に湿っている時に行う。除草剤としてはゴーゴーサン乳剤30を使用する（表2）。

軟弱野菜

◆畑の準備

土づくりは秋から冬に重点的に行う。作付の前に発酵牛糞（カウレックス）や、バーク堆肥などの土づくり資材を10ａ当たり2000～3000kg施す。切りわら500kg程度を施すのも良い。

◆被覆

露地栽培では、塩化ビニール・ポリエチレンなどによるトンネル被覆、不織布・寒冷紗などによるべたがけ被覆などいずれかの方法で保温し、生育を促す。

ただし、被覆すると中の様子が見えにくくなり、病害虫の発生に気付くのが遅れることも多いため、注意する。

◆防寒

露地では株張り系品種は寒風で葉先が枯れる場合があるので、トンネルなどで保温に努める。

みずな

◆病害虫防除

中株栽培、大株栽培では、株元に菌核病が発生することがある。株元の水はけを良くするとともに、発病株は取り除く。

なお、多発した畑では、次年度に水稲を栽培し、発生源となる菌核を死滅させる。

しゅんぎく

◆病害虫防除

葉に褐色の病斑が生じ、葉裏に白いかびの発生が見られるべと病は、ハウス栽培では通風が悪いと激発する恐れがある。換気に努め、生育初期にZボルドーを散布し、早期防除を心がける（発病後の防除は、十分な効果が見られないので、発生前から予防的に散布に努める）（表3）。

ほうれんそう

◆栽培管理

ほうれんそうは、酸性土壌を嫌うので石灰質肥料を多めに施す。地下水位が高くなる水田では、立枯病などが発生するので、うねを高くし排水に留意する。

◆除草

雑草の発生の多い畑では、除草剤のアージラン液剤またはクロロIPCを散布する（表4）。

果樹

来年の病害虫の発生を抑えるため、病害虫の発生源となる落ちた果実や枝葉は園外に持ち去り処分し、病原菌や害虫の卵、幼虫、蛹、成虫の密度を下げておく。

みかん

◆収獲

傷果や裂果、日焼け果は腐敗しやすいので、混ぜて収穫しないよう注意する。

日当たりや着色の良いものから収穫し、すそ成り果や内成り果は、着色や食味、浮皮果の発生程度を見ながら順次収穫する。遅くまで樹に着果させておけば着色と食味は良くなるが、来年の花着きが悪くなるので注意する。

◆貯蔵果の予措

予措とは、収穫後の腐敗果の発生を軽減させるために、果皮を軽く乾燥させること。貯蔵庫に入れた後、少なくとも2週間は十分通風し、果皮の水分を蒸発させる。コンテナ内は、詰めすぎると通風が悪くなるので、7～8分目程度とする。

◆越冬病害虫の防除

収穫後のミカンハダニやカイガラムシ類の防除には、ハーベストオイル（※1 60～80倍／10ａ当たり200～700ℓ／12～3月）を葉裏まで丁寧に散布する。ただし、樹勢が弱っていたり、寒害の恐れのあったりする園では、発芽前の3月に散布する。

＊ハーベストオイルは、かんきつで登録がある。

もも

◆間伐

密植園では、中まで十分光が当たらず、果実の品質が低下する。また、風通しも悪くなり、病害虫が発生しやすい。

そのため、密植園では、せん定の前に思い切って間伐を行う。

◆整枝・せん定

せん定は早過ぎないよう注意し、12月に入って気温の高い日が続けば、開始時期を少し遅らせる。

せん定の手順は、まず不必要な徒長枝や大きくなり過ぎた側枝を切り、次に主枝の先端から亜主枝、側枝の順に行う。枝葉に良く日光が当たり、効率的に管理作業ができるような樹形を目指すが、園の空間を活かして、園や樹に応じて行なう。

せん定には、枝の基部から切る「間引き」と枝の途中で切る「切り返し」がある。樹勢を落ち着かせる「間引き」と、樹勢を強める「切り返し」を組み合わせて行う。早生種は、樹勢がやや強く保てるよう30cm以上の長果枝を中心に残し、やや強めにせん定する。中・晩生種は、10～30cmの中果枝や10cm以下の短果枝を中心に残し、樹勢が中位に保てるようにする。

なお、太枝の切り口には、ゆ合促進のためトップジンMペースト（※2 原液／せん定整枝時、病患部削り取り直後および病枝切除後／3回以内）を塗布し、アルミホイルをかぶせておく。

◆カイガラムシの防除

最近カイガラムシ類による被害が増えてきている。今年発生した園では、12月中旬から1月下旬にスプレーオイル（※1 25～50倍／10ａ当たり200～700ℓ／発芽前まで）を散布する。

ただし、芽が動き出してからでは薬害の恐れがあるため、発芽前に散布する。

表1 たまねぎの第１回追肥の目安

早晩性	施肥時期	10ａ当たり成分量（kg）		
		チッソ	リンサン	カリウム
早生種	12月中旬	5.6	5.6	5.6
中生種	12月中旬	5.6	4.0	5.2
晩生種	12月中旬	5.2	3.2	4.2

表2 たまねぎ（移植栽培）に登録のあるゴーゴーサン乳剤30について

薬剤名	HRACコード	10a当たりの農薬使用量	10a当たりの散布液量	使用方法	使用時期／使用回数
ゴーゴーサン乳剤30	3	300～500㎖/10a	70～100ℓ/10a	全面土壌散布	定植後（雑草発生前）ただし収穫60日前まで／１回

※HRACコードが同一であれば、有効成分が異なっていても同一系統の薬剤なので、連用は避けなくてはならない。

表3 しゅんぎくのべと病に登録があるＺボルドーについて

薬剤名	FRACコード	希釈倍数	10a当たりの散布液量	使用時期／使用回数
Zボルドー	M01	500倍	100～300ℓ／10a	－／－

※Zボルドーは、野菜類で登録がある。
※FRACコードが同一であれば、有効成分が異なっていても同一系統の薬剤なので、連用は避けなくてはならない。

表4 ほうれんそうに登録のある除草剤について

薬剤名	HRACコード	10a当たりの農薬使用量	10a当たりの散布液量	使用方法	使用時期／使用回数
アージラン液剤	18	秋まき 600～800㎖／10a 春～初夏まき 800～1000㎖／10a ただし、芽出しまきは 800㎖／10a	100～200ℓ/10a	全面土壌散布	は種後～子葉展開期／１回
クロロIPC	23	100～200㎖／10a	70～100ℓ/10a	全面土壌散布	は種直後／１回

※HRACコードが同一であれば、有効成分が異なっていても同一系統の薬剤なので、連用は避けなくてはならない。

＊1農薬名の後の括弧内は、（希釈倍数／散布液量／使用時期）を表示しています。
＊2農薬名の後の括弧内は、（希釈倍数／使用時期／総使用回数）を表示しています。

農薬の登録内容は頻繁に変更されます。農薬は最新情報を確認して使用しましょう。
最新情報は府・農の普及課、JA、Web版大阪府農作物病害虫防除指針（https://www.jppn.ne.jp/osaka/shishin/shishin.html）から。
農産物の病害虫発生予防については大阪府環境農林水産部農政室推進課病害虫防除グループ（https://www.jppn.ne.jp/osaka/）。